

第二期 第百十三号

(初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 12. 10 定有堂書店 発行

それからの荒野

三年越しのリベンジ？

日々是雑言 (そうごん) 11

抱腹絶倒！ BMJクリスマス論文

無我

ダラダラ日記

I Wanna Be Adored

本を作る側から (33)

内坪井町日記 (18)

論語について (7)

老春 (後)

ハーンの眼

何者にでもなれる日々を歩く。

ピザ

読書のビーイング

編集後記：

奈良 敏行

岩田 直樹

萩原 俊郎

板野 円香

おぎはらきえ

鳥居 貴彦

高木 善祥

村瀬 謙介

齊藤 仁昭

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

三浦 永理

あきの素生

奈良 敏行

ドラメリア

それからの荒野

奈良 敏行

(定有堂 主人)

ここに、こうして生きている。

何かが消えたところに現れるものがある。

いま、読書のトライアングルを、読む、語る、書くと考え  
える。「読書」と「音信不通」、意識してはいなかったが、  
何かが過ぎたあとに、姿を現したのはそのような出来事だっ  
た。

「出来事」は大切な言葉だ。「いのち」は何かのこと寄  
せることでしか表面に現れることはできない。その何かに  
ことよせるそのものが「出来事」なのだ。

「読書のトライアングル」もそのような「出来事」の生  
成の物語なのだ。

こころ惹かれる「出来事」がある。『荒野へ』に描かれ  
た青年クリス・マッカンドレスの失踪する人生だ。駆け抜  
ける時間は二十四歳で静止する。そこまでだった。アラス

カ州スタンピード・トレイルの、放棄されたバスの中で発見される。餓死だった。

小さなリュックサックに背負えるだけの荷物を持つて駆け抜ける。お金も持たない。「クリスは全力疾走で背負って運べるもの以外、なにも所持するべきではないという主義でした」と証言する者もいる。お金なしでなぜ生きられるのか。人と人との間にさえいければそれは可能なのだ。移動は車を停めてヒッチハイク。移動する人たちはたくさん物語を拾っていく。拾った物語は、人と人との間で耳をそばだてて吸収されるものだった。

荒野でも生きられる。狩りをしたり植物を採集したりして生き延びることができる。そしてその物語は人と人との間にもどれば、大いに歓迎されるものだった。

しかし、そこには人がいなかった。ちょっとしたアクシデントで体力を喪失する。そうなればすべてが終わりだ。有毒な植物を食し、体力を失いクリスは餓死していく。

旅する青年は路上の物語を蓄積していく。そしてこの物語はまだまだ未来を開き手招きするはずのものだった。親しくなった八十一歳の友人に、なぜ路上へ出ないのだと手紙を送る。

《定住したり、一カ所に腰を落ちつけたりしてはなりません。あちこち動きまわり、放浪し、毎日毎日、水平線をあ

らたにしていくのです。人生の残り時間はまだまだたっぷりあります。ロン、この機会に生活を根本から変えて、まったくべつの体験領域に入ってくればいいのですが。》

ロン老人は『』のデュラヴァンを購入し、キャンプ地で生活することを迷わず実行する。遭難死するクリスよりは確かに人生の残りの時間はあった。路上でクリスとの再会を待ちわびたが、それはかなわなかった。ロイ老人はクリスの青春の夢を反芻しつつけるのだ。

《出発するため、歩くためには、怒りを携えていなければならぬ。それは外からはやってこない。(略)ここに居続けて、生きたまま埋もれていることはもう無理なのだ。わかった時に、歩き始める。》

フレデリック・グロは『歩くという哲学』でランボーの歩行をそう語る。人はそのようにして歩き出すのだろうか。クリスは確かにそうだった。

数十年の昔だが、わたしの十八歳は、下町の国道6号線を、深夜ひたすら徘徊するものだった。「事件」に衝突するまで、憑かれたように歩いた。

年老いて定有堂「読書のトライアングル」を「事件」とするようになったが、初発衝動としてオブセクションにくり返し立ち戻りつづけた。そして存在は「事件」としてしかトライアングルしない。

良寛の詩にまた「事件」の再現を知ることとなる

《木に就けば木 竹に就けば竹》

「いのち」は何かにと寄せて現れる。

2025.11.20

ジョン・クラカワー・佐宗鈴夫 『荒野へ』 集英社文庫 2007

フレデリック・グロ・谷口亜沙子 『歩くという哲学』 山と溪谷社 2025

奈良敏行＋三砂慶明

『町の本屋という物語』

作品社 2024



奈良敏行＋三砂慶明

『本屋のパンセ』

作品社 2025



三年越しのリベンジ？―夢にまで見た釧網本線に乗る

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

年末が近づくとも一年を振り返りたくなる。あれこれ思い出しても、大したことはなかった、という結論に落ち着くことが多い。今年もまた、アナログ時計の目盛りを「月」に見立てれば、下の方(三から七までは忙しくて上半分(一、二と八から一二まで)はボチボチだったかな。特筆すべきことがないにしても、それでも何かないのか、と無理やりひねり出したのが釧網本線完乗である。

『音信不通』や「今月読んだ本」のネタがないとき、「困ったときの鉄道話」に何度か救われた。直近では『音信不通』第一〇八号(二〇二五年七月号)に「乗り鉄が国土の不均衡な発展を考える。」というもっともらしいタイトルで、東海道本線全線を普通列車で乗ったこと、準秘境路線といふべき名松線を往復したことを書いた。

今回は「今月読んだ本」第二二五・二二六回(二〇二二年一月二四日)「七日連続で異なるJR路線に乗った話」の続編である。まずは、前回のおさらいから。生成AIの要

約機能を用いると便利だが、学生の宿題レポートではないので、少しは頭と手を使おう。

時は盆の最中。ホテル代がかなり割高になるが、札幌で野暮用もあったので決行。個人的な国内旅行には自家用車利用を最優先するローカル・ルール(対象は私のみ)を課している。旅程は次の通り、発着はもちろん自宅。

第一日(羽越本線)新津一〇時三五分↓新発田一一時一三分、第二日(日高本線)苫小牧一二時二五分↓鶴川一二時五五分、第三日(富良野線)富良野一一時四二分↓旭川一三時一分、第四日(室蘭本線)室蘭九時一分↓東室蘭九時一四分、第五日(根室本線)滝川七時三三分↓富良野八時四二分、第六日(東北本線)花巻一三時二五分↓一ノ関一四時一四分、一四時四一分↓小牛田一五時二七分、第七日(烏山線)宝積寺八時二四分↓烏山九時〇分。乗車距離は三〇〇・三キロ(家族が車で並走)。即座にルートが浮かぶ人は同好の士であろう。小牛田は難読駅名で、小牛田、鶴川、宝積寺、烏山の位置はなかなかわからないと思う。

トラブルが発生したのは第三日。朝六時に釧路駅に行くのと、六時三十八分発の始発列車を含めた釧網本線は大雨警報発令中のため終日運休。道東から道央へ抜けようとしても釧路・十勝地方から札幌方面への高速道路も帯広から日高山脈・白勝峠越えの国道も封鎖。万事休す、とあきらめかけ

たとき、十勝から富良野へ抜ける狩勝峠だけが通行可能なことがわかり、かなり大回りだが何とか道央へ入ることができた。その一時間後に狩勝峠は通行止めになっていた。この時点でJR完乗率は九二・八七六パーセント。

やれやれ、前置きが長くなり過ぎた。そのとき釧網本線に乗れなかったことがトラウマになり、釧路駅五番ホーム？が夢にまで出てうなされるようになった。これは冗談にしても、三年もの間、ずっと釧網本線に乗るチャンスがなかったのは事実である。

この八月、盆明けの一週間を利用して、またも野暮用があり三年越しにリベンジする機会が巡ってきた。しかし冷静に考えると、リベンジする相手は自然、天気(大雨、暴風、洪水、地震など)だから、そもそも闘って勝ち目はない。前回乗れなかったのは運がなかったというだけだ。

北海道に行くときは、行きと帰りのフェリーにはこだわりたい。本州と北海道を結ぶ直行コース(途中、寄港しない)は、鳥取に近い方から舞鶴・小樽・敦賀・苫小牧・大洗・苫小牧・仙台・苫小牧・八戸・苫小牧・青森・函館・大間・函館・青森・青森・函館・大間・函館・大洗・苫小牧・帰りは函館・青森に乗り、残すところ二〇二三年に一五年ぶりに再開した青蘭フェリーのみになった。

さて、釧路駅前のホテルには鳥取を出て二日後の夕方一

六時頃に到着した。天気は曇りで車窓の景色もそれなりに見えたが、翌朝は激しい雨。幸いなことに列車は通常運行である。釧路駅を八時五二分に出発する各駅停車「しれとこ摩周号」(二両編成)に乗る。前夜、スマホで時刻などを最終確認していると、JR北海道ホームページに指定席(七・八月限定)が一八席あることが記載されている。素人にはわかりにくいサイトに書いてあり、あわてて道の向こうの釧路駅に向かい、閉店間際のみどりの窓口で購入。

実際は指定席には数人しかおらず、二両編成の乗車率は五〇%あったかどうか。やはり盆を過ぎると観光客は急激に減るのか。網走駅着一時五九分。駅から海は近く、道の駅でオホーツク海を眺めながら海鮮丼を堪能した。釧網本線一六六・二キロを乗り、JR完乗率は九八・五一〇パーセントから九九・三六七パーセントへ。

未乗二二・六キロの内訳は、肥薩線八代・吉松八六・八キロ(二〇二〇年八月豪雨で橋梁。線路が流失し不通)と東京、大阪を中心とした六路線。不通区間は物理的に乗れないが、開業区間で最大の難関は二月から二月までしか運行されない上越新幹線支線の越後湯沢・ガウラ湯沢(二・八キロ、三分、運行日限定)である。何事もコンプリートするにはラスボスが待ち構えているものだ。

## 日々は雑言（ぞうごん） 11

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

言わんこっちゃない

「だから、言わんこっちゃない」と思った。高市早苗が権力にのぼり詰めたら危ないと感じるのは、その極右の立ち位置が理由だけではない。外交（防衛）オンチ、経済オンチだからである。

「存立危機」答弁が飛び出した時、たまたま国会中継を観ていた。「戦艦？ なんじゃそれ」今どき海上封鎖に時代遅れの戦艦など使う国はない。「これは官僚の用意した原稿じゃなくて、高市の拙いアドリブだな」と思っていたら、たちまち中国が反発した。

米国シンクタンクの戦略国際問題研究所は、シミュレーションで「台湾有事に参戦すると米軍の死者・行方不明は1万人」と予測。トランプはそんな人的損害を出すより中国

と何らかのデール（取引）を選ぶ人間だから、軍事介入するともしないとも一切言っていない。

米国が「出る」と言っていないのに、日本が「出る」と言う。「思っていたことが口に出た、というより、これは保守派へのリップサービスではないか」と感じた。

最近、彼女は確固たる思想信念を持った極右というより、底の浅い「右翼系ポピュリスト」ではないか、と思うようになった。ただただ人気のあつた安倍の政治手法をなぞり、あのような答弁で保守系の支持者を喜ばせる。だから、「安倍以上のものは出てこない、

しかし、リップサービスで戦争に巻き込まれたら、たまたまものではない。

どちらが招かれたのか？

マスコミは「トランプの訪日接待が大成功」と評価したが、高市は六本木ヒルズのすぐそばにある米軍基地（戦後接收され、東京都が全面返還を要求している）から大統領専用ヘリに乗せられ、横須賀基地の原子力空母に降り立って米軍将兵らの歓迎を受けた。これでは、どちらが招かれたのかわからない。なめられたものだ。オバマを毎回、寿司でもてなした安倍の方がよほどましだ。

「ノーベル平和賞の推薦」も、安倍の場合はトランプ自身がSNSで秘密をばらしてしまっただが、高市の場合は公の場、首脳会談でうれしそうに自ら披露した。

安倍の二番煎じといえば、経済もわかり。ただし、アベノミクスの頃はインフレ(物価上昇)誘導しようとしていたデフレの時代、今はインフレの時代。真逆なのに「物価高対策」と称して国が借金して20兆円以上もジャブジャブ金を投入したら、円安を招いて輸入品やエネルギーの価格が上がり、さらにインフレになるのは火を見るより明らか。すでに円安が急進行している。

外交・防衛・経済に加えて、どうやら彼女は農業オンチでもあるらしい。来年、コメは食えるだろうか。

ふるいにかける

小学生の頃、白土三平の『カムイ伝』をむさぼるように読んで記憶がある。その中で百姓のリーダー・正助が、お上が年貢米を計る升(ます)を見て「これはおかしいじゃないか」と抗議する場面があった。

江戸時代、米の計量には幕府が定めた全国統一基準の「公儀升」があったが、石高を上げたい藩は升を大きくし、儲けたい上方の米商人たちは升を小さくする「不正升」が横

行、またもに「公儀升」が使われることはなかった。

こんなことを思い出したのも、収穫された玄米をふるい分ける農水省の選別機の仕様が、長い間、農家と大きく食い違っていたからだ。

農水省が作況指数の算出基準に使う選別機のふるい目の幅(大きさ)は1・70ミ、農家が使っているのは1・80〜90ミ。ふるい目幅が小さいと、粒の小さな未熟粒や碎米もふるいの上に残りやすくなる。

戦後の食糧難時代は上質米なんて言うていられないので主に1・70ミが使われていた。コメの品質にこだわる今、これを使っている農家は0・3%(農水省調べ)。

「農水省の作況指数と実態が違う」。現場の声を聞いた小泉前農水相は、1・70ミのふるい目や作況指数自体を廃止し、コメ増産に舵を切ったが、高市内閣で「農水省のはえぬき」と称する大臣は、昔のように減反路線、生産調整に再び戻す考えだ。

高い米価のまま「おこめ券」をばらまいてお茶を濁すつもりらしいが、これを「王政」ならぬ「農政復古の大号令」と呼んだ石破前首相のダジャレに、「座布団、一枚！」

# 抱腹絶倒！ BMJクリスマス論文

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

ついにこの季節がやって来た。十二月といえばクリスマス。クリスマスといえば——そう、BMJクリスマス論文である。

BMJはイギリスが発行する医学雑誌で、世界五大医学雑誌のひとつでもある。そんな由緒正しい医学誌が年に一度だけ「ふざけていい」と宣言する時期が到来するのだ。

BMJクリスマス論文とは、『医学的にどうでもよきようなテーマを、真剣な科学的方法で扱う』論文であり、過去には、『外科医の誕生日に手術を受けると死亡率が上がるか』『幽霊の怒りを避ける方法』『診療所の待合室にある雑誌の古さに対する患者の苦情の根拠の探究』といったテーマが研究として取り上げられてきた。ふざけたテーマ×科学的検証『デザイン(RCT、コホート、横断研究、症例対照研究など)』という組み合わせが、この論文の醍醐味である。今回は、その中でも個人的に特にお勧めの研究をいくつか紹介したい。

◇血も凍るようなホラー映画で本当に血は固まる？『血も凍るような映画と凝固の尺度：クロスオーバー試験』

「血も凍るような恐怖」という慣用句があるが、激しい恐怖は本当に血液凝固を促すのだろうか。この疑問を検証したのが、オランダのパネル医師らの研究である。

対象者は三十歳以下の健康な成人二十四名。それぞれ「ホラー映画を見る群」と「ドキュメンタリーを見る群」に割り付け、視聴前後で血液中の凝固因子(第Ⅷ因子、Dダイマー、トロニンアンチトロニン複合体など)の変化を記録した。しかも「交絡を避けるために、満月の日と十三日の金曜日には上映を避けた」という徹底ぶりである(へえ?)

それで結果はどうだったのかというと、ホラー映画を鑑賞した群において、内因系の血液凝固に関わる第Ⅷ因子の濃度が有意に上昇する結果となった(平均差11 IU/dL 95%信頼区間1.2~21 IU/dL)。変化量としては僅かだが、著者らは「凝固第Ⅷ因子レベルが10 IU/dL上昇すること、静脈血栓症のリスクが17%増加する」という既報を引用し、この変化が無視できないと述べている。恐怖耐性のない血栓リスクの高い人(脳卒中や不整脈の既往など)は、あまりホラー映画を見ない方が良いのかもしれない？

◇『死神はどれくらいの速さで歩く?』

死神の歩行速度なんかどうやって調べるのか。最初はそう思ったが、カラクリを知ると「ああ、そういう事か」と納得できる良作である。

対象はシドニー在住の七十歳以上の健康な男性、千七百五名。主要評価項目には歩行速度と死亡率を設定し、評価は統計的解析手法の一つであるROC解析が用いられた。さて結果だが、歩行速度が時速三キロメートルより遅い男性は、それよりも早い人達に比べ死亡リスクが一・二三倍高いことが明らかとなった。また、歩行速度が時速五キロメートル以上である男性群に死亡事例はなかった。

結論はこうだ。「死神の歩行速度は時速三キロメートル。死神に追いつかれたくなければ時速五キロメートル以上で歩け」※歩行速度と健康リスクの関係は、生活環境・人種・持病などによって大きく異なります。

ここまで読めばお分かりだろう。これはフレイル(筋力低下)と死亡リスクの相関を示した、れっきとした疫学研究である。それを「死神の速度」というメタファーで表現したテーマ設定こそ、この論文最大の魅力なのだ。

◇『デイズニープリンスは医学的に幸せと言えるのか』

こちらは昨年に報告されたオランダの論文。何とも切り込んだタイトルである。デイズニープリンスと言えば、な

んやかんやあっても踊ったり歌ったりしてるうちに最終的には幸せを手に入れる存在である。その存在に対し、「プリンス自身が直面している健康リスクに目を向ける必要がある」と異を唱えた医師たちがいた。

彼らの報告によると、《煙突掃除をしていたシンデレラは、職業性肺疾患および肺がんのリスクを高め、早死にする可能性がある。そればかりか、妖精のお婆さんに大量にバラまかれた魔法のラメ(リアルミでコーティングされたマイクロプラスチック)により、さらに重篤な状態に陥るおそれがある》《ポカホンタスの崖からのダイブシーンで特に印象的だったのが九秒という長い落下時間。この落下時間を基に、高さや速度の連成微分方程式と二次抵抗を使ったシミュレーションにより崖の高さを推定した。平均的な女性の擬人化寸法および標準環境定数で仮定した際、推定される崖の高さは二五二メートル。骨折のリスクは極めて高い》とのことである……骨折で済むのか？

今年はどうな研究が集まるだろう。クリスマス論文は無料で読めるので、ぜひ年末の楽しみにしていただきたい。

# 無我

おぎはら きえ

(蔭山)

自分以外全員他人。

全くもってそうである。自分以外は全員他人。自分を産んでくれた親、自分から産まれてきた子どもといえど、肉体が離れ各々の経験、思考に基づき行動しているのだから他人だ。そこで「親だから」「子だから」と血縁を過剰に信奉して相手に干渉するから問題が生じるのだ。

じゃあ自分は他人ではないのか。本音と建前、理性と欲望など自分の中で相反する意見や感情が生じることはよくある。道端でお金を拾って、天使は「警察に届けましょう」と言い、悪魔は「誰も見てないし盗っちゃえよ」と囁く、そんな場面は古典的な漫画表現ながら人間の多面性を表している。

翻訳家の岸本佐知子のエッセイ『ねにもつタイプ』（筑摩書房）に収録されている「住民録」という一篇では、著

者の内面に生じる感情を人物像に落とし込んで紹介している。例えば「一言婆」という「つぎあてだらけの着物を着て白髪をふりみだした、推定百歳の老婆」。『翻訳が前に進まず苦しんでいると「お前にやしよせん百年早いわ」、締切りが間に合わず電話で謝っていると、「謝る語彙だけは豊富だのう』とボソリとつぶやいて疾風のように去っていく。他にも「狂犬（マナーやモラルに反した行為を目にすると現れる、金棒を持ち血走った目をした三十歳前後の男）」、「三つ編み（極度の人見知りで他人の言うことを額面通りに受け取ってしまう女兒）」など、何人も著者の内面に住みついている。

過去の失敗や恥ずかしかった経験から何か行動を起こそうとすると「やめときなよ」と内なる声が聞こえることは私にも往々にある。しかし、たまに由来不明の声が聞こえるときがある。さつさとお風呂に入って寝なければいけないがスマホを見るのを止められないとき、さつきご飯を食べたのにお菓子を貪り食べてしまうとき、「いうことなんかきいてやるもんか」という声が聞こえる。あんた、誰？

橋本翔太『わたしは「わたし」を助けに行こう―自分を救う心理学』（サンマーク出版）では「勉強する気が起きない」「貯金ができない」というような問題は、実は不安やストレスから意識を逸らす心の防衛反応だと解説してい

る。例えば試験勉強をしなければいけないのにやる気が出ないという場合。勉強しても理解できなくて自己嫌悪に陥るのが怖くて、あるいは試験に落ちた時に傷つのが怖くて、自分の心の防衛反応が自分のやる気を失わせているのだと。「そんな理由でやる気失ってたらもつと困ることになるだろう」と言いたくなるが、これらの防衛反応は元を辿ればたいてい幼い頃の傷ついた経験が由来となっているので不器用で極端で子どもっぽい。これを解決するにはその問題（心の過剰な防衛反応）が何を回避しようとしているのか、自分の何を守ろうとしているのかを解き明かし和解せよという。その和解へのステップとして、感情に名前をつけて客体化することが教示されている。例えばやる気が出ない時の感情には「どんよりさん」というように。

そうして感情と対話をして和解に導くのだというが、自分を客観視するというか、もう他者のようにケアしなければいけないのか。

加藤俊徳『一生頭がよくなり続けるもつとすごい脳の使い方』（サンマーク出版）では脳の「思考」「理解」「記憶」「感情」など八つの分野をそれぞれキャラクター化しその特性を紹介している。その中で「記憶」を司る海馬は幼児の姿で擬人化されている。海馬の、ストレスに弱い大変デリケートで受け身な性質を表しているらしい。そのた

め海馬にしっかりと働いてもらうには睡眠をしっかりとること。決まった時間に決まったことをすると海馬はそれを重要なことと判断し定着しやすいので資格勉強などは習慣化しこつこつと続けること。しかし、例えばゲームのように強烈な興味、刺激にあうと海馬はそちらに気が逸れてしまい元の木阿弥になってしまう…。

自分の脳なのにそこまで気を使わんといけんのか。もうこの自分の頭蓋骨に収まっている脳みそも他人のように思えてきた。

ところで冒頭の「自分以外全員他人」というフレーズは二〇二三年に太宰治賞を受賞した西村亨の小説のタイトルだ（筑摩書房）。主人公はマッサージ店に勤務する四十四歳の独身男性。迷惑な客や俗悪な同僚などに日々彼の精神は削り取られていく。それでも彼は「正しい人間」であろうとある決意を固める。

読んでいて共感を通り越して「この主人公は私では…」と思うことさえあった。他人が自分になることもあるのだ。

# ダラダラ日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

十月、国体が滋賀県で開かれた。セーリング競技の役員をやってくれとのことでのこのこと出かけていく。といつても下っ端には何もやることがないので与えられた持ち場を抜け出し高知県チームのテントでダラダラしているだけの四日間である。数十年前から時が止まったような監督とコーチ。早送りみたいに入れ替わっていく大学生と高校生。慣れない琵琶湖の風と藻。いいレースをしてほしいと思いつながら、どこかでそんな気持ちよく引退されてたまるかとも思っている。ギリギリのところでも一步届かなかった悔しい記憶だけを抱えて卒業してからもダラダラと競技を続けられたい。自分の引退レースを思い出しながらそんなことを思っている。十年ちょっと前、自分は徳島大学にコメンパンにされたので悔しいものにも残っていない。だが唯一、最終レースの上マークだけはトップでまわったのだった。高知の

海でオレンジ色のスピンセールを一番にあげた。よかったのはそこまでで、後ろにいた香川大学の船にあつきり抜かれて負けたのだった。呆然とするしかない。そうして呆然としたまま今もヨットになんとなく関わっている。狭い琵琶湖畔のバースで就活や内定式の話をする大学生を眺めながらスロープの藻をかいったり運営のボートにガソリンを入れたりしているのはあの最終レースで負けたせいだ。

三重、下鴨、名古屋、もっかい三重、それから近所の八百屋。イベントの出店が続く。世の中がイベント化している。イベントでしかお金を使わない、使えないことになりつつある。日常がおろそかになってゆく。店は日常だと思う。日々の売り上げがなければイベントには出られない。イベントに出ることで店を維持するお金が手に入る。どっちが大事かと言われると店である。イベントに出るでないはそのから店にもきてくれるお客さんがいるかどうか、とかつて堂島で店をやっていた古本屋の先輩が言っていた。古本市でうちのことを知ってきってくれることはうれしいことだ。だが古本市の品揃えを店でもやっているわけではないので期待に応えられていない。申し訳ないことの方が多い。そもそも「品揃え」というものにあまり興味がないのであるものを並べているだけなのだ。店では店の、出店先では出店先の売れ

筋がある。重なることは少ない。

古本の催事の前には値段をつける仕事が続いている。古本の値段はだいたいの相場を調べてつける。仕入れ値を気にすることは少ない。どうしても相場がわからない本は仕入れ値で考える。相場より安かったとしても損しなければそれでいい。自分が買い物をする側に立ったとき、安く手に入ったという記憶は意外と長く残っているものだ。その記憶が店名とセットになってくれたらラッキー。特に期待はしていない。新刊は値段を気にする必要がない。仕入れた値段を思い返して、出店料と利益がうまく行っていれば持つていく。持つていけないものも多い。損をしてでも持つていくものもある。返品できない、店では売れないかもしれない、持つていくひとがいるかも知れない。理由はいろいろある。結局、お金のことだけ考えるのは苦手だ。イベントに持つていく本はそこに誘ってくれたひとの顔を思い出しながら決める。別にそのひとに持つてほしいわけではない。ほとんどの場合、主催者は本をゆくり見ている余裕などない。どんなお客さんが来るかどんな日になるかは考えてもわからない。主催者の顔を思い出すぐらいしか確かなヒントがないというだけだ。

月末。雑誌の配達とお金の支払いと古本の買取りが並ん

でいる。どういう順で動けばいいのか、考えながら車を運転するが結局いつも同じ道を行ったり来たりしている。うまいこと丸く一筆書きで終わればいいのだがそんなにうまくはいかない。京都の道はあまり綺麗にカーブしていない。太秦に雑誌を届け、丸太町の銀行に寄って、寺町の百貨店にチラシを渡して帰ってきたらもう開店時間をとくに過ぎていく。ようやく開店した店をほったらかして家賃を払いに行く。大家さんは「あなた暖かそうな服着てるわね」と二回言った。三重で出店していた催事の入金がありほつしているともう夕方だ。今日は小学校からはやく帰ってくるはずの息子がいつまでたっても帰ってこない。

開風社

〒602-8125 京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町8  
18

080-3166-1385

info@kaifusha-books.com

<http://www.kaifusha-books.com>

# I Wanna Be Adored

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

十月二十六日(日)、本の学校シンポジウムに出席するため上京。「地域×世界」で拡張する「本の現在地」と題し、地域とグローバル両面から本について考える、というもので、分科会「いま、本のある地域の暮らし」―変わる図書館、本とまちと人―に登壇者として参加した。

私以外のパネリスト、一人はNPOやまちづくりなど、多方面で長く活動している岡山県真庭市立中央図書館・西川正さん。

もう一人は公民連携再開発で大きな成功例として注目される岩手県紫波町「オガールプロジェクト」の中核である紫波町図書館の館長・あまのさくやさん。

図書館界隈では全国的にも有名なお二人には生まれ、「なぜ私が……?」となったが、滅多にない機会と思い直しての参加だった。(お声掛けしていただいた今井太郎さんに感謝)

地域のニーズに真摯に向き合い、時には積極的にな外に出る。イベントを行い、面白そうな人をどんどん巻き込んでい

く。図書館という性質上、当然様々なルールはあるが、そこに「あそび」や「すきま」を作ること、新しいアイデアが生まれる。

東京に向かう間に読んでいた本に「学びの遊び場」というキーワードが使われていて、お二人の話を聞きながら、本に出会うタイミングって必然性あるよな、と一人でニヤニヤしてしまった。

私は主に「地域とのつながり」の観点から、竹氏倫子さんの『鳥取県写真史』の購買層や『見る場所』のメディア考古学のクラウドファンディング、地元のNPOとの関りについてお話した。会としてちゃんと成立していたか不安だったが、後日送られてきたアンケートでは概ね前向きな意見でほつとする。

残念ながらも行ったことがないので、まずは車で二時間弱の真庭市に行ってみよう。

\*

翌日は少しゆるめのスケジュールにして、出版社と書店を回った。

まずはあさイチでA社。お互いの近況報告や、通常の仕事とは別に個人で作られているZINEの話など。

一応仕事をしに来たので、現在品切れ重版未定になって「著者の一人が鳥取出身」個人的にも影響を受けた「ウ

チのお店に来るお客さんなら確実に買ってもらえる」書籍を買切りで仕入れたいので検討してほしい旨を伝える。実現したらガッツリ売ろう。

昼前に当店の売上シエアナンバーワンのC社へ。初めましてのごあいさつの後、昼食をご一緒する。この町の人たちから愛されているのが良くわかる定食屋にて、サバカツとハンバーグ定食をオーダー。美味であつた。食後はカフェに移動し、コーヒーを飲みながら来月の新刊を見せていただく。相変わらず硬軟揃えたラインナップで仕入数に悩む。返事は毎回メールで送っているの、その後は雑談。前職はミス터리やSFで有名なH書房にお勤めだったとのことで興味深い経歴を聞いたり、共通の知人の話題などで盛り上がる。最後に、「別の出版社で品切れ重版未定」「地元関連」「これから全国的に注目される可能性がある」「本をぜひ文庫化してほしいと打診したところ、レーベルカラーにも合っているのでは」と好感触であつた。実現したらガッツリ売ろう。

\*

書店は三店。ネットで話題の某書店は「???」だったの  
で名は秘す。(知りたい方は店頭にて)

二店目は三軒茶屋にあるトワイライイトへ。ビルの三階と屋上、カフェとギャラリースペースあり。落ち着いた空間と、丁寧に選書された本棚。ポール・オースターの『432

1』を三桁売る、静かなパワーを感じるお店だった。

最後は西五反田にある久禮亮太さんのフラヌール書店。常連の方とお話したり、小学生がスツと入ってきたり、街の本屋のたたずまいで、初訪問なのに落ち着く。

久禮さんに個人事業主／独立系書店として、色々と込み入った相談をさせてもらった。

「私たちは独りで立っている。だが孤独ではない、本があれば」を実践する二日間だった。

#### 【参考文献】

『学校図書館をハックする』C.Aホルズワイス他 新評論

これと『読む文化をハックする』の二冊を、面識のある書店員が勧めていて気になったので。「本を選ぶことについてのヒントがたくさん。」

『台湾生まれ 日本語育ち』温又柔 白水ブックス  
フラヌール書店にて。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

## 本を作る側から (33)

村瀬 謙介

(小取舎)

倒的な支持を得た。だが、治安維持法により逮捕され、三四歳から四八歳までの一四年間獄中生活を余儀なくされる。獄中闘争の末に偽装転向して一九四二年に出獄。八九歳で死去するまで旺盛な文筆活動を続けた。

九月に『「見る場所」のメディア考古学―鳥取から日本映画史を描き重ねる』を出版したが、その本の中にもお名前が上がっている高取正人さんが、革命家・福本和夫を主人公とした映画のシナリオ本を書き上げられ、小取舎から出版した。実をいうと私と会うもう何年も前からそのシナリオの大部分を書いておられたが、新たな事実が出てきたり、四五ページもある解説を書かれたりして今年秋の発刊となった。まずは福本和夫についての解説冒頭を要約させてもらう。

福本和夫は一八九四年に鳥取県東伯郡下北条村(現北栄町)で生まれ、ドイツやフランスに留学して最先鋭のマルクス主義を学んで帰国し、論文を矢継ぎ早に発表して注目された。日本での本格的なマルクス研究のさきがけとなった理論は「福本イズム」と称され学生やインテリ層から圧

鳥取県を代表する画家、前田寛治の出身地も北栄町である。福本と前田は倉吉中学で同級生となった。高取さんがこのシナリオを書いた動機の一つは、福本の思想が前田の画風に影響を与えたことは美術研究者らが何度も論文に取り上げてきており、前田は福本と関連づけると面白いドラマが生まれれると思ったからだという。ご存知だと思うが前田寛治の絵のいくつかは鳥取県立美術館で観ることができ

これまで福本の活動を扱った本は論文調のものが多く、しかもマルクスの知識がある程度ないと理解しにくいものがほとんどだったそう。そういった意味で言うところ福本の自伝よりドラマチックで面白く、福本と前田の人となりを知るにはいい入門本だ。このシナリオで革命家・福本和夫は「どうすれば社会はもっとよくなるのか」をまじめに考え人々に考えるきっかけを与えたということがリアルな人間として描かれる。しかし、彼は武力で戦ったわけではなく、

仲間を率いて革命を起こしたこともない。私が編集や校正をしながら生まれたのが、「では福本は革命家と言えるのか？」という疑問であった。レーニンはロシア革命を指導し、国をまったく新しい仕組みに変えた。毛沢東も農民や労働者をまとめ、中国に巨大な変化を起こした。彼らは「行動を武器にした革命家」だと思うのだが、それに対して福本は、行動よりも理論を重視した。彼は書物を通して社会の仕組みを説明し、じっくり考える力を広めようとした。この点で、福本は「考えで社会を動かす革命家」と見ることができる。

社会の問題を分析し、人々に新しい考え方を示したマルクスの理論を福本は日本語でより多くの人に届け、社会を見る新しい目を広めた。つまり、福本は日本に思想の革命をもたらした存在だったとも言える。

またガンジーとゲバラを見ると、二人はまったく違うスタイルで社会を変えようとした。ガンジーは暴力を使わず、平和的な方法で人々を動かし、ゲバラはその逆で、ゲリラ戦によって社会を変えようとした。どちらも強い意志で行動した「実践型の革命家」。福本はこの二人のように身体を張って前に立つのではなく、言葉や理論によって人々の

意識を変えることを大切にしていた。ふむ、福本が目指した革命の形はほかと大きく違っていたのだな。

今年公開された大好きポール・トーマス・アンダーソン監督の映画『ワン・バトル・アフター・アナザー』は、革命家たちの苦しみや迷いを描いていた。作品の中では、戦いを重ねながら理想を追い続ける姿が印象的。革命には決意や犠牲が付きものだと思いがさされる。福本は命を危険にさらし戦う革命家ではない。福本の革命観は、文章や議論を通じて、社会の問題点に光を当て、人の心を変えることこそ本当の革命という考えに近いものだった。これはすぐに成果が出る方法ではないが、長い時間をかけて社会をじっくり変える力を持っている。

#### ・小取舎の最新刊

#### 『人間疎外の時代』

高取正人 著

本体二〇〇円

発行 2025.11



## 内坪井町日記（18）

齊藤 仁昭

（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

十一月某日

ロー・ボルジェスが亡くなったとのニュースを読んだ。最近聴きまくりだったし、ライブの映像は元氣いっぱいだったの（とは言っても七年くらい前のものだが）、俄には信じがたい。Zeca Baleiroとのアルバムを出したばかりでツアーの予定も立っていたらしいが、急に亡くなってしまったのだろうか。死因もよくわからない。七十三歳だったのにと。知り合いでもないわけだけど寂しい気持ちになってしまふ。妻や子に言う（と涙がこぼれそうだったので言わずに過ぎしてしまつた）。

ディスクユニオンが何か出さだろうと思つてオンラインショップを検索してみる。私のいちばん好きなソロのセカンドアルバム『A V I A L A C T E A』邦題無かったと思う

けど、『天の川』ですよ。ロマンチックにもほどがある。大好き…。（のブラジルオリジナル盤が出ているではないですか…。予想よりも高い…。高すぎるよ。しかしだ、しかしですよ、今月は誕生日の月なんだよ僕。誕生日だし、僕が持つていべきだと思つた。俺へのプレゼントだ。おめでとう俺。買ったね。すごくいい音質の盤でもなかったが、一生聴く。ヘッドホンで聴いたら、涙がにじんだ。

全然関係ないかも知だが、初めて街角クラブの「Tudo Que Voce Podia Ser」を聴いたのはforce of natureのアルバムのタワレコ購入者特典ミックスCDだったと記憶している。あのCDどこいったかな。探してみよう。

十一月某日

ストーンローゼズのマニが亡くなったとのニュースを読んだ。六十三歳だったそう。ローゼズのファーストアルバムは30年以上聴き続けている。不登校気味の高校生活、学校に行かずに公園のベンチで寝転がりながら高齢者のゲートボールを眺めたりしつつ、CDウォークマンで聴いていたのを思い出す。

異様なほどにシンプルなスリーコードの曲ばかりなのに

4人のアレンジとメロディセンスが素晴らしい。何よりダンスミュージックに仕上がっているのがいい。「she bangs the drums」のベースラインもシンプルなのに最高だ。寂しい。12インチが実家にあるはず。探しに行かねば。

メモ：今年の九月にはエルメート・パスコアールが、十月にはディアンジェロが亡くなっている。八十九歳と五十一歳。

十一月十五日

八代宮にて七五三の出張販売。今年は十五日がちょうど土曜日だった上、天気もとてもよかったため多くの親子連れで賑わった。しかし年々、赤飯や千歳飴を貰おうという方は減っている。この傾向は止めようがないだろうと思う。

十一月二十三日

八代妙見祭。今年は三連休の中日かつ晴天。早朝から準備をし、参道にて販売。お客さんも多く、大福などの生菓子がよく売れた。健全な商売ができてよかった。

妙見祭の販売は、参道の刃物店の軒先を借りて販売する

のだが、刃物店のご主人がいつも猪鍋をふるまってくれる。この猪鍋がとても美味く、ものすごく血が滾る。今年もうまかった。カボスと塩と唐辛子で作った自家製の薬味が乗っていたのだが、それも元気がでるうまさだった。

十一月某日

高橋悠治の本を引っ張りだして読む。『たたたう音楽』（晶文社、1978年）。p. 71『ピクトル・ハラ』の文章が素晴らしいので全部引用したいくらい。音楽に政治を持ち込むな、とかいう人はおしなべて●●だと思ふ。●●には好きな言葉を入れてみよう。

「石になってしまった魂のかくしている力を爆発させるために、詩人や歌い手は導火線を用意する。」

## 論語について(7)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以德、齊之以礼、有恥且格。

(為政篇第二・第三章)

子〔し〕曰〔い〕はく、之〔これ〕を道〔みちび〕くに政を以〔もつ〕てし、之〔これ〕を齊〔ととの〕ふるに刑を以〔もつ〕てすれば、民は免〔まぬか〕れて恥〔は〕づること無し、之を道〔みちび〕くに徳を以〔もつ〕てし、之〔これ〕を齊〔ととの〕ふるに礼を以〔もつ〕てすれば、恥〔は〕づること有りて且〔か〕つ格〔ただ〕し。

本章の「道之以政、齊之以刑、民免而無恥」と「道之以徳、齊之以礼、有恥且格」とは対句である。対になるのは、「政」と「徳」との両語、「刑」と「礼」との両語、また「民免而無恥(民は免〔まぬか〕れて恥づること無し)」と「有恥且格(恥づ

ること有りて且〔か〕つ格〔ただ〕し)」との両句である。「政」と「刑」とによれば、民は「無恥」になるが、「徳」と「礼」とによれば、「有恥」になると言っている。両句は対義的であり、故に「政」と「徳」と、「刑」と「礼」とは、それぞれ対義的である。

先ず、「政」と「徳」とが対義的であるとは、どういう意味か。注釈書の多くが「政」の語を政令の意味に解し、「政」が法治主義、「徳」が徳治主義をそれぞれ表わすとしている。が、この両語は、本来にこうした意味において対義的なのだろうか。前回、孔子の説く「徳」には「無為」が根本的態度として存在すると述べたが、私見では、この意味において「政」と「徳」との両語は対義的なのである。つまり、「徳」には「無為」が根本的態度として存在するように、「政」には「無為」の対義的概念、言わば「有為」が根本的態度として存在する。但し、この「有為」の語は、「人為」か「作為」の語で言い直す方が適当かもしれない。戦国末以降、「無為」に代わり「自然」の語が多用されるようになるが、その対義語は「人為」か「作為」であろう。

改めて言えば、「無為」とは、何もしないことではない。「無為」とは、柄谷行人によれば、「為」を否定することである。その「為」とは、古代では特に呪力による強制と武力による強制を意味したと考えられる『帝国の構造』。思うに

本章の「政」の語は、このような呪力および武力による強制を前提とする統治の在り方を意味するのである。が、このような力による強制の統治は、民が自発的な倫理（「恥」）を損なうという理由から、孔子は反対であった。

以上のことは、「刑」と「礼」についても言えるだろう。「無為」を説明するのに、柄谷は呪力と武力とを挙げるが、そのうち武力は暴力と地続きと言える。すると、「刑」とは暴力による強制のことであるから、これも「政」と同様、「有為」を意味する。一方、「礼」はこれと対義的であり、「徳」と同様、「無為」を意味する。その意味で、「礼」には暴力によらない非強制が根本的態度として存在する。思うに呪力や武力によらない非強制Ⅱ「無為」とは、「徳」を身につけることで相手に自発的行動を促すことである。同様にまた、暴力によらない非強制Ⅲ「無為」とは、「礼」を身につけることで相手に自発的行動を促すことである。いずれも自発的という点が「無為」においては重要なのだ。

孔子の説く「礼」が右に述べたような非強制Ⅱ「無為」を意味することについて、示唆的な発言をしている研究者にハーバート・フィンガレットがいる。フィンガレットは、本章について次のように述べている。「孔子は、〈礼〉を用いる支配者と、命令や恫喝、規制や刑罰を用いようとする支配者を、明確に特徴づけて対比している（為政Ⅲ）。強制による支配は目

に見え肌で感じられるが、巨大な（そして神聖な）〈礼〉の働きによる支配は見ることも触れることもできない。〈礼〉は威厳に根差した各自の自発的協調を通じて働く。したがって、聖なる儀礼の完成は、精神的なものであると同時に、美的なものでもあるということができる」（山本和人訳『孔子聖としての世俗者』）。

「聖なる儀礼」Holy Rite という語は非日常的な印象を与えるが、「礼」は日常的なものである。フィンガレットは、次のように説明している。「――私は街であなたを見る。私は微笑みかけ、歩み寄り、握手するために手を差し出す。そして、（注意しなければならぬのは）いかなる命令も策謀も強制も特別な仕掛けや道具を用いなくても、また私がいかなる努力を払わなくても、あなたは自ら振り返り、微笑み返し、手を挙げる。我々は握手をする――私があなたの手を動かすわけでもなく、あなたが私の手を動かすわけでもなく、ただ完全に自発的な協働行為として。我々は普通、このように協調的な「儀礼的」行為の微妙さ、驚くべき複雑さに気づかない」（同前）。「礼」が「無為」を意味するとは、まさにこのような文脈においてである。

## 老春（後）

古賀 啓三 チャット・GPT

（米国ミシガン州在住）

チャットGPTに、「谷崎の鍵と瘋癲老人日記を読んだが鍵の方が文芸的価値があると感じたのはなぜか」と聞いてみる。そこは機械ものの浅ましき、さう、そうお感じになつたのは旦那でゲスから、当方としてはどうもこの、などと勿体ぶるでもなく、間髪を入れず、『鍵』では、エロ、テイシズムが知的な仕掛けと道徳的緊張を伴って描かれていますが、『瘋癲老人日記』では、老いによる性欲の衰えと滑稽が前景化し、エロスが「崩壊寸前の欲望」として描かれます。これは晩年の谷崎の「人間の終末の観察」として重要ですが、美と醜、理性と欲望の拮抗という点では、『鍵』ほどの均衡を保っていません、といけしやあしやあと答えるが、機械ものの言うことなど信用しない。信用しない割には、老人小説の代表作は何か、などと根掘り葉掘り聞き、しま

いには、老人小説を書くことはできるか、と問うてみる。はい、それでは冒頭だけ書いてみましょうか、などと臆面もなく、「静かに老いる」ではなく、「今を生き直す老人」、をテーマとする作品を書きます、と言うや否や、十五秒ほどで『午後四時のコーヒー』という小説の導入部を書き上げた。

と言うわけで、この先ちまちまと小説を書き続けるのが馬鹿馬鹿しくなつたので、筆を折ることにしました。

と思ひかけたが、気を取り直して書き続けることにしたのは、『午後四時のコーヒー』は僕を書く小説より稚拙であると判断したからである。しかし、この場合、AIが勝手に書いただけで、こちらから何の注文もしない。最近チャットGPTをいじり始めてみて、意味のある回答を引き出すには、この注文、というか、指示が重要であることがわかってきた。よって、良い小説を書かせるには、登場人物の容姿や性格、職業等々、与える情報の詳細いほど良いはずだ、と考えながら、いや、それ以前にと、性懲りもなく、これまでも繰り返し書いてきた「臍の緒」に思いが至る。物語が書かれることを触発する、書き手の私的体験「臍の緒」と言う例の思い込みである。

僕・貴君に良い小説を書いてもらうには、登場人物の性格等の詳しいプロンプトが重要だと思うけど、人間が書く

小説の場合、作者の生い立ち、育った環境、友人関係、恋愛体験、食べ物の好き嫌い、出身校、友人関係、職業、などといった私的体験が作品に影響を与えると思う。そのような私的体験、もしくは人格を、貴君に植え付けた上で、小説を書いてもらう、と言うことは可能か？もしくは近い将来可能になるのであろうか？

チャット：AIは記憶も主観も体験も感情も持たず、「入力された情報をもとに最適な文を生成する」仕組みで動いています。したがって、子どもの頃の環境、初恋の経験、家族関係、学校生活の思い出、トラウマ、食の好み等を、「AI自身が体験したもの」として持つことはできません。しかし「架空の作者人格を定義し、その視点で小説を書かせる」とは、すでに高度に可能です。たとえば、あなたがAIにこんな「設定」を渡すことができます。1960年生まれ、北海道の港町育ち、祖父が船大工で、その影響で木と海の匂いが刷り込まれている、高校時代の孤独な恋愛経験が創作の核、20代で上京して編集者に失恋、以後は周縁へと目が向く作風、生涯の好物は母の作ったイカの煮付け。このような作者像(架空の「作者人格」)を与えて、この作家が、現代の東京を舞台に短編を書くとしたら？と頼むと、設定した人格が「作者の意図」として働き、小説全体に一貫した温度・価値観・語彙の偏り・嗜好が反映される、という状態を

作れます。これはすでに実用レベルで機能します。これは人間作家の「バックグラウンド」↓文体・テーマ構造に近いです。人間の作家は生育環境や恋愛経験がテーマ選びや文体に影響しますが、AIに「そのような背景を持った作者として振る舞わせる」ことで、似たような効果かなりの精度で再現できます。

今は、一つの小説の中で一貫性を保つ、必要なら「架空の人生史」をプロンプトで与える、という形ですが、将来的にはAIが「長期的な創作人格」を持つようになる、つまり、一度設定した作家人格が「作品を重ねて深化」する、

以前の創作を踏まえて、テーマや語彙が変化する、「作家としてのキャリア」が積み重なる、特定の時代経験や思想の変遷を持つAI作家、こうした「AIの作家キャリア」のようなものが技術的には十分可能です。これは法律・倫理・安全設計の整備が必要ですが、技術的には数年〜10年以内になり実現性があります。たとえば、中期から作風が暗くなるAI作家、特定の事件を境に文体が変化するAI作家、老年期になり、死への恐れが作品を彩るAI作家、などといった、「人生の変化」を持ったAI作家も設計可能です。

## ハーンの眼

ムラカミヒロミ

(フライングブックマン)

した学生のノートを元に復元したものである。

先ずは『英文学史』という浩瀚な講義録。

キリスト教以前の異教時代から、ヴィクトリア朝に至る、日本語にして八百ページに及ぶ長大なものだ。

注目したいのは、十八世紀文学を論じた中の「神秘及び恐怖ロマンズ」の項目である。

ウォルポールから説き始めて、アン・ラドクリフ、クララ・リーヴ、マシュー・グレゴリー・ルイスと来て、ウィリアム・ベックフォードには、何故にというくらいの紙数を費やす。

明治三十年代の日本で、ベックフォードを『ヴァテック』を論じた人がいた。そして、それを聴いた学生たちがいた。これが驚きでなくて何だろう。

『ヴァテック』の最初の翻訳は、昭和七年、世界名作文庫に、矢野目源一の翻訳(抄訳)が収録されるまで、実に四半世紀以上待たなければならなかった。

しかも、その後は、二十一年の英米名著叢書版(小川和夫訳)があるものの、わが国でゴシック・リバイバルの機運が高まる五十年代まで、完全に忘れ去られていたのである。

ラファディオ・ハーンは、原初的、根源的恐怖を知る人であった。幼時に大嫌いな教会に頻繁に連れていかれた時のことを回顧して、こう書いている。「その内部は私には凶ましい悪夢のように思われた。私が、ゴシック建築のある種のが呼びさます特別な恐怖を知るようになったのはそこでのことであった。私はいま恐怖 horror という言葉を古典的な意味で使っている。お化けが出てくる時のぞっとする恐怖という古代的な意味においてである。」(平川祐弘訳「ゴシックの恐怖」、『明暗』所収)

ハーンの恐怖に対する感覚は、終生、変わることがない。それは、如上の幼時の記憶に始まって、若い頃に培ってきた各種文学の深い教養と洞察によっている。

ハーンが東大で行った講義の記録、というのがある。受講

さらにには、『英文学畸人列伝』でも、わざわざベックフォ

ドで一項を立てているのである。これほどお気に召したの  
は、濃密な東洋趣味(単なる『アラビアン・ナイト』の模倣で  
なく、独自の創作と評価している)だけでなく、別の理由も  
ありそうだ。

『ゴシックの恐怖』にあったとおり、ゴシック教会で感じた  
恐怖、さらに窓の尖った輪郭が、お化けの形になって夜な夜  
な彼を苦しめ、ゴシック天井の尖頭アーチに超自然の妖気  
を感じ、空に聳える尖塔への畏怖を覚える。

成程、ベックフォードが異常なまでに情熱を燃やしたフォ  
ントヒル・アベイ(広大なゴシック教会。七十メートルの高塔  
を具えた)の建築と見事に交差するではないか。

さらに、『畸人列伝』の講義では、「マンク・ルイスと〈恐怖・  
ミステリー派〉」を立項し、先の『英文学史』では、ベック  
フォードの序論程度に触れられていたゴシック文学史をよ  
り詳細に述べている。

重要作品は、『オトラント城綺譚』、『ヴァテック』、『ユドル  
フォ城の怪奇』、『マンク(破戒僧)』そして『フランケンシュタイ  
ン』であるとし、ゴシック最後の作品としてマチューリンの  
『放浪者メルモス』を挙げているのだが、この流れの的確さは  
どうだ。(この項では、最後にスティーヴンソンの『ジキル博

士とハイド氏』を高く評価して閉じている)『オトラント』も  
『マンク』も『メルモス』も、昭和の半ばを過ぎて漸く全貌が知  
られるようになったのであり、『ユドルフォ』に至っては、ほん  
の四年前に完訳が出たという有様なのだ。

『文学の解釈』には、「小説における超自然の価値」の項が  
あり、ゴーストリー(霊的)という言葉を終始使っている。ア  
ングロ・サクソン人は、精霊(スピリット)や靈魂(ソウル)や亡  
霊(ゴースト)をまとめて、そう呼んだのだ、と。リットン  
の「幽霊屋敷」やポーの「アッシャー家の崩壊」、さらにフーケや  
ゴッティエを引きながら、幽霊、夢魔、夢について自在に論  
じている。

「夢魔の感触」(『明暗』)でも、幼時の一人寝の恐怖から説  
き起こして、幽霊を恐れる心理を分析した。

確かな鑑識眼に裏打ちされた、筋金入りの幽霊(お化け)  
好きと言えるだろう。

何者にでもなれる日々を歩く。

三浦 永理

(三十歳・女性)

風の強い中、授業に向かうために道を渡る。すると、耳から冷たいものがチラリと落ちていった感覚だけがした。

こっちに来て、初めてモノを失くした。東京であつた祖母の葬式から鳥取に帰るときに買った青色のイヤリングだった。あれだけ、スリにモノを取られることを怖がっていたのだけれど、初めてモノを失くしたのは、ロンドンの風のせいだった。

授業の後、もう一度だけ道を通ってみたが、暗い上に、これだけの人がひっきりなしに歩いていけば、見つかるわけもない。都会の道だ。

大都会のロンドンでは、誰も私のことを知らない。だから、大学に入りたての頃のような気分になる。何にでもなれる。何者でもないのだから。と言つても十八歳の頃のような無防備な冒険心は私にはもうない。

フルタイムの学生になるのは、大学以来。大学生的「暇」が私の人生を侵食している。

東京のように、知り合いもいるわけでもなく、コミュニティがあるわけでもない。そんな場所に移ったとき、過去の私の場合——鳥取に引越したときも含めて——心を開くまでに時間をかけてしまいがちなので、一年かけてやつとリズムを掴んでいた。が、残念ながら、イギリスの修士課程は一年間しかない。一年しかないので、あつという間に進んでいく。紅葉が終わって、葉の落ちた木を見て、色づく木々をこの街で見るとはもうないのだと悟るように。

そんな中で、週に三回の学校の授業以外は、かなり自由だ。しかし、大学の課題で、英語の論文を読んだり、グループでの課題が出たりすると、意外と暇でなくなる。「自分の興味のある範囲も自分で読むのが修士課程」などと言われて、Reading Weekという中休みが一週間あつた。

「読む」という行為に計画性が求められる。が、大抵の場合部屋で読んでいても、眠くなってしまう。興味があるのに進まない。大学生の「暇」の感じを懐かしく思いつつ、どうしたらいいのか。試しに空き時間の時間割を作ってみては、うまくいかず、場所を変えてみても、眠くなる。いつのまにか、私の体が雇われ人体質になっていたのかもしれない。

学校以外の活動でやっていることは、例えば、寮のイベントへの参加。Goodenough College と呼ばれる私のいる寮はロンドンにありながら、オックスブリッジのカレッジを思わせるような伝統的な建物かつ、コミュニティ作りに勤しむ寮だ。大学の近くにありながら、その一区画だけ、魔法がかかったかのように安全な空気が流れている。二つの建物に分かれていて、その間には、その区画共同のガーデンがある。私の部屋からは、ちょうどこのどかなガーデンが見えるので、窓辺の景色が一番気に入っている。

知り合いに会うと、すぐおしゃべりが始める空気に、「一人でいたいんだ」という気持ちになる時もあるが、この寮のいいところはそういうコミュニケーションを取る機会が多くあるところだろう。寮の中にも Society と呼ばれるサークル活動があったり、知識人を招いての Pot Talk があって、支援金が出るスタディーツアーがあったりするので、この辺りの活動に参加しないと損になると気づいて、十一月はなるべく参加するようにした。が、残念ながら、スタディーツアーは選考を突破できず、参加していた Society は消えたり、復活したり、安定しない。

こっちにきて、根無し草になって、以前は居心地が良かったはずの孤独が、ダメ人間の証のように感じられるのは不

思議だ。それは、私が鳥取で職場にしても、趣味の場にしても、居心地のいい場所を作ることこそ、成功してしまっただけかもしれない。

私は新しい「きみしき」と出会っている。

大学ではキャリアセンターが充実したネットワークを使っで、ワークショップをしている。そのなかで、EdTech のマーケティングのイベントに参加した。登壇者は、UCL で修士課程をしているマーケット。

学習者をユーザーとして捉え、彼らのニーズに応えるようなサービスを生み出す。そんな発想を聞いていると、確かに私自身が「教える」ことにこだわり続ける必要はないのだと気づく。いつのまにか自分は「教える」ことしかできないと思いついていた。何者になるか、狭めていた。だが、ある意味、この修士課程はそれすらもリセットできてしまうボールのひとつなのだ。

英語圏の社会では、私は何者でもない。そして、何者にもなれる可能性がある。ただし、正しく道を選べば。

そのボールをどう転がすか、決めかねているうちに、「きみしき」が私を捕まえようとする。それを交わしながら、今日も道を渡る。

# ピザ

あきの素生

(くうねるめがね)



子どもの頃、古本のリサイクル市に行った。記憶にあるのは二回ほど。今思えば、近くの図書館の主催だったのかもしれないが、図書館ではなく町内会の集会所で本の入った箱を見て回ったような気もする。それくらい臆げな記憶の中、選んだ本ことはよく覚えていてる。

図書館には、ほぼ二週間ごとに(つまり、本の返却期限にあわせて)通った。子どもの足で通うには遠かったので、家族と一緒に。「連れて行ってもらった」というほど能動的ではなく、「連れられて行った」の方が、当時の様子を正確に表していると思う。親からは、図書館では静かにすること、本を借りたり、返したりするときは、バーコードのシールが上になるように本を揃えて、図書館の人の方に向けて出すように、ということだけ教わり、読む本につ

いては何も言われなかった。いや、その本の前も読んでじゃん、くらいは言われたかもしれないが、無理強いされることはなく、結局は同じ本を選ぶことも度々だった。本の渡し方については、例えば人に刃物を手渡すときは、刃ではなく柄の方を向けて渡すといった心遣いとかマナーといった類のもので、同じ本を何度も読むことを妨げないというのも、教育的な理念からなされたものではなかったと思う。でも、そのおかげで、本を読むことや図書館に苦手意識を持つことはなかった。

図書館ではたくさん本にふれることができる。手元に残らないので、読んだことを覚えていない本もあるだろう。子ども時代にどの本を読んだ、ということ必ずしも覚えている必要はなく、そこから得られたものが多かれ少なかれ自分のどこかに残っている。それでいいのではないかと思う。

その一方で、手元に置いておくことで、特別なものになる本もある。リサイクル市で手にした本も例外ではなかった。手元にずっとあり、何度も何度も読んだ。その中の一冊に出てきたのがピザパイだ。お客さんが好きな具材を選んでのせることができる、特別なピザパイ。そのくだりをわくわくしながら読んだ。登場人物と一緒に具材を選んで

いる気持ちになって、食べてみたいなど憧れた。長じて本の補修やブックかけのイベントに参加する機会があり、補修用を選んだのが、ぼろぼろになっていたこのピザパイの本だ。本棚から取り出したとき、裏表紙に「〇ねん〇くみ 〇〇〇〇」と当時のクラスと名前を書いていたのを見つけた。家で読む本なのになぜ、と思うと同時に、大事にしていたんだなとわかって、丁寧に補修とブックかけを行った。

少し大きくなって、テレビドラマなどで宅配ピザの存在を知った。現在はそんなサービスはないのかもしれないが、三十分以内に届かなかった場合は無料という謳い文句に驚いたのを覚えている。当時、実際に宅配ピザを注文する機会はなかったのですが、空想の中の生きもの、みたいな位置づけになっている。学生時代に、たまに友人たちとピザを取るようになったものの、その三十分ルールが活きていたかは覚えていない。友人のひとりがピザの宅配員のアルバイトをしていたので、そんな苛烈なサービスは過去のものとなっていたことを願う。

ピザを一から自分で作ったことは、これまで一度もない。ピザ生地を宙でぐるぐる回して伸ばすシーンをテレビなど

で見かけ、あれは自分では無理だと決めつけていた。しかし、宙で回さなくてもピザ生地を作れると知ったのちも、作ってみようと思い立つことはなかった。出来合いのおいしいピザがスーパーなどで手軽に手に入るからでもある。

そんな自分にも作れるのがピザトーストだ。本式のピザではないので、あの「ピザパイ」とは別のものであるとして認識していたが、ピザを作れない自分にとっては、これが一番「ピザパイ」に近いのではないかと今では思う。買って来た食パンに、これまた買って来たピザソースをかけて、ハムやソーセージ、輪切りのピーマン、とろけるチーズをのせて、トースターで焼く。この具の中で、私はピーマンが肝だと思っている。ちよつとした苦みと歯ごたえを与えてくれる。パンが焦げない程度の時間では火が通り切らないので、ジューシーさも残っている。チーズを多めにすることもあるし、（冷蔵庫にあれば）あらびきウインナーをのせることもできる。最近朝食にこのピザトーストを食べることが増えた。簡単だがボリュームがあり、朝から元気になる。何より、「ピザパイ」を思い出して、少しうれしくなるのだ。

## 読書のビーイング

奈良 敏行

(笈の定有)

本屋の人間が読書を語る。本屋の人間のビーイング。この一冊の本と関わることで自分はどのように存在しようとしているのか。本屋の人間はいつも他者に「本」の幸いを届けようとしている。だからいつもなぜこの本を読んでいるのかということを自問自答している。

ビーイング、本を読むことの中に住まう。自分一個の生は、この世の一部しか見えない。他者のもたらす時間と空間の豊かさの中にあってはじめて「この世」が見える。知ることとは他者の存在との出会いによって成立する。この他者が本の中に住まうと信じるのが本屋の人間である。

本屋の人間の読書のビーイング。本を売るといふ日常で多くの本に出会う。わたしの本屋のビーイングは、本の中から言葉を拾い、拾った言葉を生成変化させることだった。本屋の仕事を、言葉を拾い上げて他者に届ける、と狭く考

えていたのかもしれない。言葉を拾い上げ生成変化させる、と自分の営みを明確に規定すると、対象となる本は自ずと人文書が多くなる。拾い上げる言葉とは「概念」だからだ。小説からはあまり言葉が拾い上げられなかった。そこにあるのは概念ではなく情感だからだ。一口で言えない世界だ。定有堂教室「読む会」は人文書中心だった。たくさん言葉を拾えた。その後小説を読む会（「読書室ビオトープ」）ができて、小説好きの人たちに接するようになった。そこにあるのは人それぞれが推す、それぞれの小説作品だった。小説のビーイングというのだろうか。作者の背丈が反映されたものだった。

「小説がなかなか読めない」と言ったら、「小説って結局は戦後文学に尽きるのではないだろうか」とある人が応じた。テーマとして個人の背丈があり、そしてそこには外部があった。そういう時代の小説は存在論的小説と言つていいのかもしれない。

そんなやりとりのせいか、ふと思いついてこの八月に、佐多稲子『樹影』を読んだ。長崎に原爆が投下され、その三年後に出会う男女の十年にわたる物語だ。ここでは言葉（概念）を拾うことはできなかった。

二人は昭和二十三年に出会う。喫茶店の女主人と店のインテリアを設計する画家という個性的な二人の遭遇だ。わ

たしはこの年に生まれた。父母たちはこのような風景の中に暮らしこのように愛し合ったのかもしれないと思った。古風な愛の物語だ。画家の名を麻田晋といい、女主人の名を柳慶子という。彼女は華僑の子なのだ。

《慶子は、麻田の持つ世界に自分もより一歩近づきたいとおもった。自分を育てることが過去になかったようにさえおもえて、彼女は自意識をひろげている。》

《慶子は、自分がやつとそこに到達したばかりの意識を、そのとおりのようには言葉にし得ないでいた。》

二人の熱情を言葉にできない以上、その愛の深みは日々の情感の揺れの中に沈んでいくしかない。果てしない愛の苦しみが続くのだが、戦後九年目あたりから表面化する、遅れてきた「原子病」がそれぞれに決着をつけ始める。

二人の愛が密室の中で成熟することを許さない外部が、ここには存在する。慶子は日本人として生まれたつもりだったが、外部が華僑だとその存在を規定していく。その声に応じるように喫茶店の片隅に中国語の雑誌を置き始め、愛人に取り残されてからは、同時に「中国書店」も経営する。活動が実る間もなく四十六歳で原子病に迫いつかれる。

中国人の多い街の祭りや風景が描かれる。諏訪神社のくんち、精霊流しの盆祭り、思案橋、浜町、眼鏡橋、天主堂。もちろん原爆の投下後の悲惨な街々の風景の残滓も。そし

て慶子が死ぬ頃にはこれらの痕跡も街の中から消えていくのだった。

言葉を拾うことはできないが、この風景は自分と無関係ではないと思った。そしてたぶんわたしのための風景は現在形の街にはなく、戦後の残影にはじまるこの物語の中にしかないと身にしみるのだった。

小説に言葉を拾うことはできないが、記憶を拾うことができるのだと知った。

2025. 08. 28



(参考)

佐多稲子『樹影』講談社 1972

## 案内



ドラメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん(県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア(市役所二階 水曜夜・土曜昼

・定有堂教室と太極拳の詳細は  
下記の、QRコード参照

(@ドラメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー

・エスキース(倉吉)・森の生活者・邯鄲堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS(定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記：

出石に行ってきました。かつて片道15キロ歩いて(歩かされて)史跡を巡った遠足は、足が痛かったことぐらいいか記憶にないのですが、とても賑わっていました。驚き。

あの永楽館にも行ってきましたよ！ 帰りに朝来の本屋さん「本は人生のおやつです」にも。こちらも素敵でした。

ドラメリア(編集長)

最近ノンフィクションに興味を抱いています。古典は『冷血』でしょうか。筆者と対象の距離が近づきすぎて、その後書けなくなつたという話にひかれます。小松由佳『オリブの丘へ続くシリアの小道で』河出書房新社、写真が距離をなくします。佐々涼子さんの本も続けて読んでいます。「生と死」をめぐる入れ子構造のように運命が重なりあつていきます。当事者と一体化した世界です。

奈良敏行(発行人)

